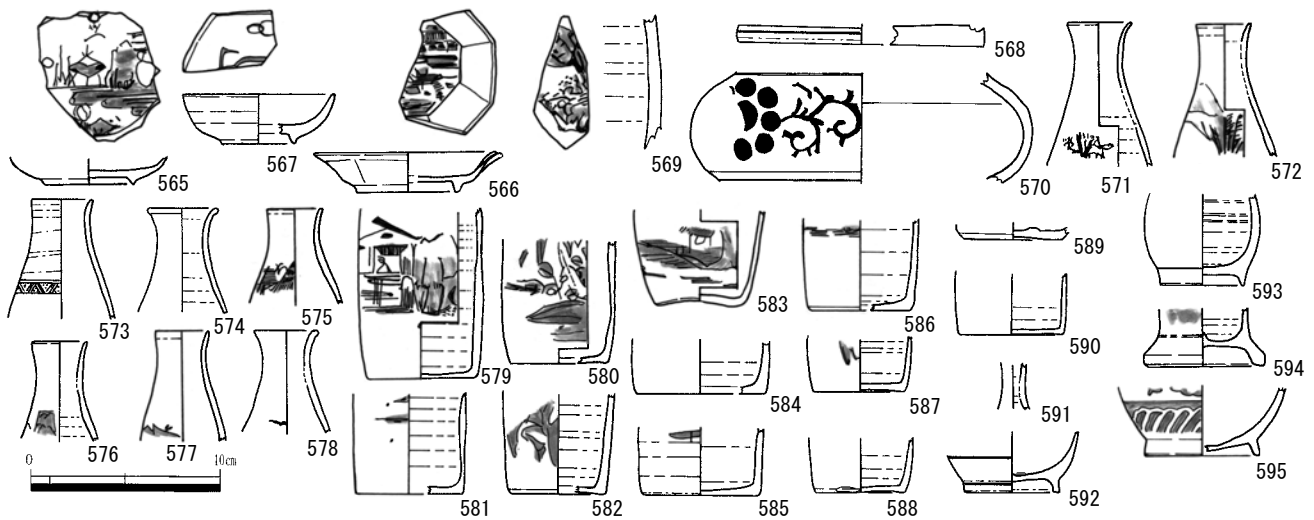


第18図 ウツロ谷窯物原出土陶磁器(2)



第19図 ウツロ谷窯物原出土陶磁器(3)

概要

ウツロ谷の窯跡は、石州系の陶器と出石系の染付、伊賀・信楽系の陶器を同じ窯で焼いており、『御国日記』や『日本窯業史総説第五巻 陶磁器4』（水野 1991）（以下、『総説』）の記載と概ね一致する。

特に磁器は陶石産地の掌握や呉須などの原材料の確保をはじめとする総合的な技術がないと焼成し得ない。また城下をはじめとする周辺遺跡で、同窯の製品が一定量出土している。窯の所在地も浜坂地内にあたることから、これが幕末から明治にかけて操業された浜坂焼の窯跡と考え、浜坂焼のウツロ谷1号窯、ウツロ谷2号窯とし、伝世品と表採資料を除き、発掘調査で出土した資料（三谷 1982）からその様相を検討する。

1 出土状況

発掘調査では2基の窯跡のトレンチ調査が実施され、1号窯は大口、1～7房、煙道、2号窯は大口、1～11房が確認された。ほかに物原や作業場が調査されている。ここから千点ちかくの遺物が出土した。

各々の窯体内から素焼きの未成品や窯道具が出土していることから、窯の最終段階に、未製品を含め窯道具などを廃棄して操業を終了したと考える。

2 分類

(1) 出土地点による分類

発掘調査においては、1号窯体内、2号窯体内、物原出土遺物毎に取り上げられており、この順序に拠る。次に個々の製品・未成品を陶器と磁器に分け、各々器形ごとに分類した。ただし、窯道具については多数のため、全ての窯体内出土資料と物原出土の1点について計測、掲載した。

(2) 陶器・瓦

a 碗 (1～4・408・478～480)

1・2は緑灰色の釉、鉄釉で絵付け。3は外面淡黄色、内面にぶい橙色の釉。4は陶器の小型の碗または坏。408はやや大振りの碗。明灰色の釉。478ともに緑灰色の釉。479は口縁部が玉縁状に折り返す鉢。480は口縁部は水平方向に延び、挟り高台。内面は露胎。天目調の釉をもつ。

b 鉢 (5～10・410・483～492)

5は薄い黄緑の銅釉で「セ」字が書かれる。7・8は緑灰色の釉に薄い鉄釉で絵付け。9・410は素焼き。483は大型の鉢。484・485は口縁部が玉縁状に折り返す鉢。4・5・486は乳白色釉の鉢。10は素焼き。

487・488は輪花の鉢。490は内外面で乳白色と緑灰色釉をかけ分ける。乳白色には黒褐色釉で絵付け。同じ製品を重ね焼きする。489・491は鉢の脚台部。6・492はともに植木鉢の口縁部で、石見焼きに類例がある（島根県教育委員会ほか 2001）。

c 大皿 (11～13)

11は碁笥底状。他は高台部。11・12は素焼き。13は褐灰色系の釉を施す。

d 中皿 (14・15・481・482)

14は素焼き。15は灰白色の釉に黒褐色の釉で絵付け。481は白色と暗褐色釉で草花の絵付け。482は薄い鉄釉で楓の絵か。葉の絵付けを施すが、陶土・焼成は黒味が強く、見込にはハケ状工具による線が輪状にめぐる。石州など他窯のものか。

e 小皿 (16～22)

16・17・22は素焼き。18は輪花の小皿。緑灰色の釉に茶褐色と白色の釉で絵付け。目跡は3か所。19は緑灰色、20は淡黄色、22は灰白色の釉を施す。

f 段重 (23・24)

陶器の段重。23 赤味の強い陶土。焼成は堅牢で他窯のものか。24 は緑灰色系の釉を施す。

g 灯明皿 (25～55・409)

25～46・409 はかえりをもたない伊賀・信楽系の器形。芯の滑り止めのハケ状の溝を交差させる。小型のものど中型の2法量ある。乳白色の釉のほか、40のような赤色系の釉、45のように緑灰色の釉をもつものもある。47～55も灯明皿。かえりをもつ石州系の器形。芯受けの半円状の切込みがある。

h 徳利 (56～90)

口縁端部はやや外反して玉縁状になるものと、直立して幅広の端部をもつものがある。高台も高いものと幅広で低いものとあるが、全体形状が明らかなものはない。いずれも緑灰色がかかる釉に鉄釉で字を書く。76は肩部に多条の凹線を施す。

i 中型徳利 (91～93・146・147・437)

91～93は筒状のいわゆる蕎麦徳利で、灰白から黄褐色系の釉を施す。146・147は体部に連続する凹線文が入る。437は2号窯から出土。陶土の色を生かし、黒色の釉をかけ流す。

j 土瓶 (蓋：94～118、身：119～124・494～498)

つまみをもつ蓋には、高いかえりをもつ94～97ともたない98～110がある。落し蓋(111～118)は主に緑灰色で絵付けはない。

身は石州系と伊賀・信楽系がある。前者は495で落とし蓋と、119・120・494・498はかえりをもつ蓋とセットになる。他は不明で、かえりをもたない蓋とセットになる身は確認していない。497は注ぎ口の先端部に三本の線が入る、信楽系陶器共通の絵付けをもつ。

K 行平 (125～130・413・414・501)

125～128は蓋。石見系の赤色の帯をもち、連続するハケ状工具により施文。石見焼に類例がみられる(鳥根県教育委員会1992)。

129・130・413・414・501は行平の身。414はハケ状の工具ではなく、連続刺突により類似する文様を施す。501は縦方向のハケ目状工具の線が連続する。焼きは堅牢で、胎土も異なる。石州など他窯のものか。

l 鍋 (411・412)

411の口縁部が「て」の字状に延びる。弦手をもたない鍋。いずれも素焼き。412は体部片。

m 弦手付鍋 (131・132・415～420・499・500)

器壁は薄く、外底面を除き緑灰色がかかる釉。外面下半は火をうけるために露胎となる。499・500も同様。415～420は小型品。底部に数か所の脚が付く。2号窯のみで出土した。

n 小型甕 (421)

外面肩部に連続する細い横方向のナデ。素焼きの上から黒褐色の釉で絵付け。2号窯のみで確認した。

o 香炉 (438・493)

438は素焼きで連続する凹線文。493は素焼きであるが、口縁部を内側に折り返すため香炉とした。

p 花器ほか (134・151・152・502)

134は素焼き。体部に連続する凹線文。502は黄褐色の釉に、濃い調子の釉で横方向の線が連続する。器形は筒状か。151は仏花瓶の頸部か。152は花器類の底部か。437は無釉に黒褐色釉で流しがけする。

q 播鉢 (135～145・422～436)

口縁端部は中央1～2段にわたり窪む玉縁状。内底の播り目は中央を三角形に残すものと、中央から放射状に播目を入れるものがある。大型品は関西系で、小型品は石州系のように隙間なく密に播目を入れる。

431～436は小型品。口縁端部は1～2回窪む玉縁状。播目は底面から密に入る。2号窯のみで確認した。

r 御神酒徳利 (148～150)

148は黄灰色の信楽系の釉に出石染付風の松の絵付けをもつ。150は連続する凹線文をもつ。

S その他 (154)

154は埴埴。窯内から出土しており、使用後に廃棄されたものか。

t 瓦 (155～164)

ロクロを用いておらず、外面に指頭圧痕が認められ、型作りと分かることから瓦と判断した。窯道具の中には瓦焼き独特の窯道具は出土していないため、素焼きを前提としたものか。いずれも小型品で、実際の屋根瓦というよりも、別な用途で使われたと考える。155は丸形で内側に型の痕、156は波状で一枚作り、157は平形で内面に型の痕か。158・159は丸形で、外面に型の痕。160・161は軒平、162は棧瓦。163・164は用途不明の小片であるが、型作り。用途は不明で類例の検討が必要である。

(3) 磁器

出石焼を写した出石系の製品ではあるが、白磁や青磁も若干含まれる。同じ時期には岩美郡内に鶴殿氏の経営する浦富焼が存在する。そのためこれら三者の分類は基本的には困難である。ただし後述するが、器形や絵付、釉調などから分類することが可能なものが一定量存在する。

a 碗 (165～168・504～511)

165・504は蓋付の碗。他は蓋無しの碗である。このうち166・167・505・506はやや大、他はやや小ぶり。文様は鶴や竹など、浦富窯と共通するものが多い。



図版 1 出土遺物写真 (1)



図版 2 出土遺物写真 (2)

b 小碗 (169 ~ 171・440・512 ~ 519)

湯呑に使用された碗で、端反する 169 ~ 171・514 ~ 516 と、他の丸碗がある。草花の文様を主体とする。

c 蓋 (520 ~ 523)

蓋に使用される呉須は特に濃く、絵付けは細かな草花の文様が多い。

d 急須 (524 ~ 528)

524・525 と 526・527 は同一個体か。525・528 は注ぎ口に染付で 3 本の線を入れ、信楽系と同様の絵付けを施す (図版 2)。

e 白磁 (529 ~ 531・590)

529 のように染付をもたない白磁のほか、染付とは釉調が異なり、やや乳白色のてかりの少ない釉調のものがある。530 はつまみをもつ小型の器形、531 は皿、590 は中型徳利である。529 は浦富にも類似するもの (図版 5) あり。

f 青磁 (532・533)

やや黄色がかる釉調。532 は頸部をもつ器形で、花器か。533 は皿。確認しているのは少数に留まり、香炉や青磁の染付は確認していない。

g 青白磁 (508・534)

青白磁調の釉調をもつ段重の底部。あるいは白磁か。508 の碗も青白磁調の染付。浦富にも青白磁調の発色をもつものがある (鳥取陶磁器研究会 2012)。

h 鉢 (535 ~ 543)

535 は大型、ほかは中型の鉢である。口縁端部は水平方向に広がり、縁には絵付けあり。外面には草花をあしらうが、535 ~ 540 のように内面に絵付けのないものと、541 ~ 543 のように絵付けを施すものがある。

i 八角鉢 (544 ~ 550)

ウツロ谷窯では、一定量出土する。いずれも外面に菱形を十字に区切り、角に点をもつ、または渦文を代わりにする独特の文様をもつ。内外面ともに面毎に二本線で区切り、草花や格子などの文様を施す。八角鉢は出石で焼いているものの浦富窯では確認していない (鳥取陶磁器研究会 2012)。

j 大皿 (551・552)

器形は異なるものの大皿を 2 点確認した。見込には精緻な絵付けを施し、呉須も濃藍である。

k 中皿 (172 ~ 175・554 ~ 560)

554 ~ 556 のように大皿のように大胆あるいは精緻な文様をもつもの、175・558 のように定形化した笹文など、出石や浦富と共通する文様をもつものがある。557 は見込に胡蝶文をもつ皿で、焼成不良のもの。559 は見込に風景を描き、浦富にも同様の絵付けがみられる。

l 小皿 (176 ~ 180・561 ~ 567)

見込に風景や草花をあしらう。177・178・564・565 は中央に楼閣を配する定形化した山水風の絵付けを施す。出石や浦富 (図版 5) で確認している。

m 花器 (568・569)

いずれも体部が直立する。円筒形状の花器になると考える。

n 香炉 (570)

大ぶりの蛸唐草様の絵付け。呉須は濃く上質である。内面は露胎である。

o 中型徳利 (442・571 ~ 589)

口縁部はわずかに開く。頸状に直立する頸部や、端部に玉縁をもつものなどは確認しておらず、出土品を見る限り器形は一定する。体部の絵付けは風景を主体とする。出石の口縁部は大きくラップ状に開くものが目立つが、浜坂と浦富では確認していない。

p 御神酒徳利 (181 ~ 183・591 ~ 593)

絵付けは松や竹、風景などを主とする。浦富にも同様の文様をもつもの (図版 5) がある。

q 仏飯器 (184・185)

染付は確認していない。あるいは染付のない白磁か。浦富にも類似するもの (図版 5) あり。

r 香立 (594)

脚台をもつ香立てと考える。

s 坏洗 (595)

器形から、坏洗と考える。

(4) 胎土と釉調、文様

胎土の色は焼成により異なるため、含有物も含めて総合的に判断した。陶器、磁器ともに 5 分類した。両者とも砂粒、黒雲母または黒色粒、長石などの含有物の結晶の大きさ、含有量の多少など違いがある。

陶石は浦富と浜坂の陶石は一致するとみられ (岩美町教育委員会 1970)、発掘調査では小片ではあるが数点の陶石が出土しており (図版 2)、岩美町周辺のものなのか産地の特定が期待される。

一方、陶土は複数ある。きめが粗く焼成後は灰色になるものと、きめが細かく焼成後は橙色を呈するものがある。特に後者の焼き上がりには特徴があり、消費遺跡で抽出することは可能である。

陶器の釉は、灰色、緑 (オリーブ) 灰色、黄灰色、褐灰色、黒色がある。文様は、石州系の大徳利には黒色釉で文字、信楽系の土瓶には黒色と黄緑の釉で絵付けなど、各系統の絵付けを踏襲する。染付は白色の生地ではあるが、僅かに藍または緑 (オリーブ) がかかるものが多く、呉須は浦富のように薄い藍色よりも強いものが目立つ。やや緑かかる発色をもつものもある。